

「変革する力：声なき声が社会を変える

—サイレントプアと向き合うコミュニティソーシャルワーカーの実践から—

社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会

勝部 麗子

勝部 おはようございます。ご紹介をいただきました、豊中市社会福祉協議会の勝部と言います。よろしく願い致します。先ほどから、学長が、「力量あるソーシャルワーカー」と言われているので、力量があるのかと少しどきどきしながらですが、今日は、こういう場所に來ましたので、皆さんに私の実践を精いっぱい話したいと思います。

話に入る前に、自己紹介がてら、「プロフェッショナル—仕事の流儀」(NHK)という番組の冒頭のところを少し紹介します。それでは、ちょっとご覧ください。ちなみに、皆さんの中で「サイレント・プア」(NHK)をご覧になった方はどれぐらいいますか。結構たくさんおられますね。ありがとうございます。では、お願いします。

ちょうど去年の今ぐらい、7月の頭に、「プロフェッショナル」という番組に出ました。6カ月にわたる取材だったので、この間に、孤独死の問題があったり、ごみ屋敷の2年間ぐらい会わなかった人に取材期間中に会えて、それとともに心が開いて、そして、おうちを片付けるという結果に遭遇しました。

そして、先ほど最後に出てきた、アルコール依存症になってしまっていた脳卒中の後遺症の彼は、ご両親が亡くなったあとで一人暮らしをしていたのですが、体が動かない、仕事ができないということで自暴自棄になって、生活がどんどん乱れていき、近所の人たちからとても排除をされていました。

彼は、自分は何をやってもうまくいかないというところでそういう暮らしをしていて、彼の家の周りは、PTAの人たちから、「通学路としてちょっと危ない」と言われるような状態で、近所の方々から排除されていた方でした。でも、最終的に、取材期間中、番組の中で、彼はどんどんやる気になって、今は週3日働けるようになって、日曜日には、ヘルパーの(介護職員)初任者研修の資格を一生懸命取りに行っています。

そして、今まで彼を排除していた地域の住民たちは、彼が就職できたことをみんなでお祝いしてくれました。民家に招いて、もちろんお茶でというのがみそでしたが、彼の就職祝いを持ち寄りでもってもらいました。そして、彼は、今は独りぼっちではなくなっています。

社会には、SOSを出せなかったり、自分の問題をなかなかオープンに話せない人たちがたくさんいます。私たちが目指すソーシャルワーカーは、そういう人たちを1人でも少なくしていく。そして、そういう人たちを自分が支援することと併せて、その人を支える人たちをその周りにどのぐらい増やしていけるか。そういうことを思いながら、日々、豊中市で仕事をしています。

実際、こういう取り組みをしたということですが、私は、大学を卒業してからすぐに社協の道を歩みましたが、実際、社協にものすごく憧れて入ったかという、大学時代は、社会福祉協議会の存在をほとんど知らなかった感じでした。もともと学校の先生になりたいとすごく思っていて、そこ

も夢としては捨てきれずに、「福祉なんか興味が
ない」みたいな感じでずっと言ってきました。

教育実習に行ったときに、私の心は大きく決ま
りました。スタートラインに立てない子どもたち
がたくさんいるという現実を見ました。給食費が
払えない。あるいは、毎日遅刻をしてくる子は、
実は、お母さんが朝方まで仕事をしていた、送り
出しが弱い。そして、忘れ物をすることを注意さ
れている子どもは、実は、家の中が親なし状態で、
自分のものがどこにあるか分からないという状況
でした。

こういう人たちが、世の中にたくさんいるのだ。
その子たちが、社会の中にきちんと参加できるよ
うに、スタートラインに立たせるようにしていこう
と思ったときに、やはり福祉がしっかりしないと
駄目ではないかということ強く思うようになりました。

それで、私は、福祉の最前線に行かないと、と
いう思いで、西成区釜ヶ崎という、日雇い労働者
の町が大阪府にあり、そこで労働者の方々の支援
をしている所で、アルバイトを始めました。

この町は朝3時から始まっていますが、私たち
が出勤する頃には、労働者の人たちが、朝から飲
んで、町のあちこちで寝ています。当時は閑空が
できる頃でしたので、すごくたくさんの労働者が
日本中から集まっていました。そして、何で朝か
らこんな状態なのだろう、働かないのだろうとい
うのは、おぼろげながらに分かっていましたが、
「3時ごろに来てご覧下さい。3時、4時からこ
の町は始まっているよ」という話がありました。

先輩に連れられてその時間帯にいたら、5時ぐ
らいに、結局若い人、頑丈な人、元気な人が、ワ
ゴン車にどんどん乗せられて、人買いをされて連
れていかれます。そして、障害がある人や高齢者
の人、体の弱い人は、そのまま残されていく、まさ
に弱肉強食の現実をその場で見ました。この国
のセーフティーネットはどうなっているのだろう
かということ、すごく思うようになりました。

今度は、セーフティーネットということで、一
番最後のとりでであろうと思った福祉事務所に実

習に行きました。そこで、目の前の人を助けたい
というつもりで、みんなを取りこぼさない最後の
とりでであると思っていた福祉事務所の仕事が、
実は、いわゆる公的なものは、全て規則とか条例
とか法律に定めてやることです。オフィシャルな
ものは、できるできないをいろいろとジャッジし
ていく仕事ということがよく分かりました。

65歳以上でなければ高齢者施策が使えないと
か、障害者の手帳を持っていないければ障害者で
あっても支えることができないという問題であ
ったり、住民票がなければその人を支えることが
できないという現実を、たくさん目の当たりにしま
した。

例えば、行旅病人としてホームレス状態の人た
ちが来ますが、そういう人たちを支える手立てが
ないことに、胸がすごく苦しくなった思いがあ
りました。

仕事はやりましたが、この現場はいったい何を
しているのだろうかという気分になってしまっ
て、実習期間中に涙が止まらなくなりました。指
導してくれている担当者が、何か困らせているの
かとすごく心配されましたが、私は胸がいっぱ
いになっていました。

この大学は「社会事業」という名前を使ってい
ますが、実際、目の前の人を助けていくという福
祉の本質のところは、では、誰ができるのら
うかと思ったときに、社会福祉協議会というの
が、住民主体で地域の人たちと一緒に福祉をつ
くり上げていくという組織だと知って、見たとき
に、すごく創造力のある仕事ということを感じ
ました。それは、自分があるように見えたことと、
こういうことができる可能性がある組織ということ
にすごく憧れを持って、私が生まれ育った町を
良くしていくために、豊中市社会福祉協議会に
勤めることになりました。

いろいろなことができる可能性があると思いま
したが、私の社協は、昭和58年に法人格を取
ったので、全国で一番最後に法人格を取った社
協でした。入った頃は、出向の人たちとか、上
司の人たちは、みんな市からの派遣の人たち
だったとい

うことと、新人は、1年たつとみんな辞めていきました。結局、待遇がとても悪かったのです。組織ができたばかりということもありますが、そういう状態でしたから、「何か気持ちだけで続けていくことが難しい」と言って、私の前にいた人が辞めていくという状況でした。

誰も来ない。そして、誰からも頼りにされている感じがしない社協で、何でだろうと思いました。とにかく、この組織が、たくさんの人たちが頼りにしてくれて、ここにたくさん声と人が集まる場所にしたい。そのことを一心に思いながら、私はこの職場で頑張ろうと思いました。

最初に、介護者家族の会の組織化、介護者家族の会の調査を命じられました。それと、ボランティアセンターの立ち上げをすることということで、「ボランティアセンターってどこにあるんですか」と言ったら、「君の机です」と言われて、「え？」と思いました。「じゃあ、ボランティアの人は、どこに行ったら、どういう方がおられるんですか」と言ったら、「探すのが君の仕事だ」と言われました。40万人の町の中にボランティアをしてくれる人たちをどうやってつくっていくのかと道が遠い感じがしましたが、今は、8千人のボランティア組織になっていきました。

介護者の調査も命じられましたが、実際、どうやって調査していいかもよく分からなかったので、いろいろなネットワークで、保健所とか、(健康福祉部) 高齢者支援課とかの協力で調査をしました。「親を介護しているのが、娘なのか、配偶者なのか、どういう人たちがやっているのか」みたいなこととか、「健康状態はどうなのか」みたいな調査をいろいろやりましたが、こんなものをいろいろ聞いたって何になるのかと少し思いながら調査をしていました。

私は、最後に1個だけ、自分のこだわりで、「同じ悩みを持っている介護者同士が集まれる会があったら参加しますか」と質問を入れました。そのことは、みんなはあまり関心がなかったので、気付かれぬまま調査表に残って、それで出しました。

500人ぐらいの調査で90%以上が返ってきましたが、80人の人が、「会に入りたい」と書いてくれました。「やった！」と思いました。「そうか！」と思いました。そして、80人を集めるために、第1回目の介護者の集いを計画しました。これは、私が一年生のときに頑張ってやった仕事です。そういうことを一生懸命やって調査した結果をもとに、その方々に、「第1回目の介護者の集いをやります」と案内したところ、返ってくる返事が「欠席」です。「え？」と。

80人入る会場ですから、100人ぐらいの会場を用意して、関係機関の人たちもみんな来てもらって集いをやると身構えて頑張っていました。結局13人しか「出席」の返事が来なくて、当日になったら、また休む人が出てきて、10人しか集まりませんでした。会場はがらがらです。そして、関係機関のほうに人数が多くなって、当時、こんな格好悪い事業をやりがってという感じで上司に怒られて、「人集めもうちょっときっちりできないのか」と言われました。

すごく落ち込みましたが、来た人たちは、そこで涙を流しながら自分の介護のつらさを一生懸命語るという場面ができました。「内容は良かったな。でも、何をするのか、みんなうまく伝わってなかったのではないかな」と思って、2回目をやる時、80人全員に、一生懸命その手紙を添えて、どういうことをやったかというニュースを作って送りました。

2回目こそはたくさんの人に集ってもらえるだろうと信じて集めましたが、2回目になると、今度は8人に減ってしまいました。世の中というのは、結局、80人の人がみんな、「やりたい」と言うけれども、実際は誰も登録しないのではないかと落胆しました。私が独り善がりでこういうことをやっていることがおかしいのかと思いました。

そのときに、「この事業をやっても、皆さん、なかなかご出席いただけないので、私、辞めようかなって思うんです」と少し落ち込んで話しました。そうしたら、「辞めないでください。私たち

は、今までずっと独りぼっちで真っ暗な道路を歩いてきていたんです。やっと仲間に出会えたんです。その仲間と出会うっていう機会を与えてくれた社会福祉協議会が、自ら共有の心の明かりを消すようなことをしないでください」と1人の介護者に言われました。

そのとおりだと思って、「そうか。別に、社協は、行政と違うので、全員に公平・平等にやるような事業を一生懸命考えるというよりは、今、本当に困っている人、マイノリティーの人たちで声が挙げられない人たちを1人でも支えていくことをきちっとやっていくということは、やっぱり意味があるんだ」と、自分なりにすごくすとんと心に落ちました。それで、人数が少なくても、みんながこうやって喜んでくれるのだったらいいと思って、「介護者家族の会を結成する」案内をしたところ、80人が入会しました。

当時はまだ介護保険もありませんでしたので、実は特養がありませんでした。そして、デイサービスセンターもありませんでした。ですから、当時は、ヘルパーは、一人暮らしの高齢者の所へは行きますが、介護者がいる人の所には行かないというルールになっていましたので、介護をする人は、家を空けて出ることができませんでした。

私は、こういうことが分からず、介護者は集まれると思って、自分がいいかげんでした。でも、その人たちが集まって、いろいろな問題をどんどん発言していく、悩みを聞く中で、声を挙げられなかった人たちだということがよく分かりました。

今まで、介護をすると、自分が全部抱えて自己責任でやるしかなかったことでどこにも声を挙げることができなかったのが、私たちがそういう場を提供したことで、彼女たちは声を上げられるようになって、デイサービスができ、特別養護老人ホームができました。ショートステイは、今まで他市まで預けに行っていましたが、そういう所ありませんでした。これを何とかしなければいけません。

「勝部さん、知っていますか。入院するとき、

私たちは救急車で入れるけど、退院するときって、葬儀屋さんの霊柩車のある支援会社、そこしか持っていないので、そこに頼んで帰ってくるんですよ」と聞いたときに、本当に気の毒だと思いました。この人たちが元気で帰ってくるときに葬儀屋さんに電話するのはどんな気持ちなのだろうと思ったときに、何とかしないといけないと思いました。

今はデイサービスの車はたくさん動いていますけど、当時はそういうものはありませんでしたので、では、豊中市で、リフトが付いていて、車椅子がリクライニングになって、寝たきりの方でも乗れるものを豊中市に走らせようと、みんなで決めました。

でも、社協にはお金がありませんので、そういう問題があったときにどうやって解決するか。助成金を申請しまくりました。そして、いろいろな寄付をしてくれる方をお願いをして回ることを繰り返して、豊中市で初めてリフト付きの自動車が導入されました。

でも、運転をする人たちをボランティアの方々をお願いしていたら、また職場の中でもめましました。ボランティアの人がそんなことをして、事故があったら誰が責任を持つのだという話になるわけです。確かにそうです。ただ、その車ができるまでは、みんなマイカーで送迎してくれていたもので、それよりはいいのではないかということいろいろと議論をしました。

当時、私はボランティアセンターを担当していましたので、そういうボランティアをどんどん組織していましたが、その人たちが、「ボランティアをするのは、自分たちの意思でやっているんだ。事故は自分持ちなんだ。誰かにそんな責任を負わせるようなことはしない」と職場で上司の人たちに向かってはっきり言ってくれました。私がそのたびにおろおろする姿を見て、「後ろに俺らが付いているから、そんなことで心配する必要がない」と言ってくれました。そういう背中を押してくれる人たちの中で地域の住民たちに育てられながら、私は、今、こういう仕事をするようにな

りました。

豊中市は、大きな転換期が二つあります。一つは平成7年の阪神・淡路大震災です。震災のとき、私は、ボランティアセンターを担当していました。震災の朝5時44分、大きな揺れがありました。豊中市は、大阪府最大の被災地で、17万世帯のうち1万5千世帯が全半壊してしまいました。大きな揺れで、こんなことで私はこれから人生が変わるのだと、朝、腹をくくりました。

私は、ゼロ歳と3歳の子どもがいました。自分の家も被害をかなり受け、食堂で茶わんが割れまくって、スリッパを履かないと一歩も踏み出せず、子どもが泣いているしどうしようと主人と話しているときに、近所の人たちが、「大丈夫か」と声をかけてくれました。「そうか。震災のときって、市役所は助けに来てくれないんだ。ご近所の人なんだ」と思いました。「近所の人たちがこうやって助けてくれるっていうことを、私は、社会福祉協議会で、地域福祉って偉そうに人に言っていたけど、ほんとに助けるってこういうことで声をかけ合うことなんだ」と実感をしました。

そして、平成8年から、小地域福祉ネットワーク活動、大都市の中で見守りをしたり、声かけをしていくことを本格的にやるようになります。最初はみんな避難所で生活をしていましたが、そこから仮設住宅に移りました。仮設住宅に移るときに、たくさん問題が出てきました。

まず、障害者の人、高齢者の人たちは、避難所に長くいて疲弊をしていますので、仮設に早く入れてあげないとということになり、抽選をして、そういう人たちは優先的に仮設に入っていました。建った所からどんどん入れていきましたので、コミュニティーがばらばらになってしまいました。新しく入る人たちは、抽選でいろいろな所に入れてしまいました。

皆さんは福祉を経験しているので、今では常識になっていますが、当時は、住環境を早く調えることが優先だと思って、コミュニティーがなくなるという発想はありませんでした。

みんながばらばらになって仮設住宅に入った途

端に起こったことが、孤独死でした。今までの知り合いの人たちがいた避難所だったら、毎日声をかけてもらったり、足が悪い人の代わりにお弁当を運んでくれる人がいたり、性格がちょっと落ち込む性格をよく分かってくれる民生員が声をかけてくれたりということで生活できていたのが、仮設に入った途端に独りぼっちになりました。独りぼっちになると、誰も訪ねてくることがない生活になって、生活はできるけれどもも生きているという実感がしない暮らしに変わっていき、その途端に、孤独死がどんどん起きていきました。

そこで、私たちの孤独死への対策が、そこから本格的にスタートします。町は、自然に置いておいたら人と人が勝手につながるのではないということを実感しました。やはり意図的にそういう人たちにつないでいく自分をつくらない限りは、みんな支えていくことはできないということで、私たちは、震災後、各小学校校区を担当しました。

豊中市では、もともと昭和50年代に校区福祉委員会を組織していました。昭和50年代に組織されていた校区福祉委員会、地区社協は、各種団体で構成されていますが、ほとんどがイベント、行事をやるのがメインの活動で、啓蒙開発、地域大会、グランドゴルフとかをやっていました。

誰もが安心して暮らせる町を目指しているこの組織は、実は、その中の誰もの中に、「ひきこもり」の若者であったり、外国人であったり、ごみ屋敷の住民であったりという人たちは、もともとあまり想定されていませんでした。イベントに出てきてくれてつながっていける人たちだけをもともと考えていたことが、よく分かってきました。

38校区ありますので、私は、震災の年から校区福祉委員会の中に入っていきながら、地域の中で助け合い、見守りによる呼びかけ活動をやりましょうと話をしていきました。今は、見守り・声かけ活動は、1万2千世帯の見守りをしています。17万世帯のうち1万2千世帯を見守りようになっています。

「見守りをしましょう」と言うと、当時は、自治会の方々とかに、「勝部さん、僕たちはもうつ

ながっているよ。知らないのは君たちだけだ。みんなつながっているのだから、そんな助け合いを今更しようなんてことを大上段に言うのはおかしい」と言われました。「そうなんですか。でも、例えば、この団地にナナミさんというご夫婦がいます。あそこは、奥さんがご主人を介護されて、階段の上がり下りができなくてとても困っておられる。ああいう方々の問題っていうのは、福祉委員会ではどう考えるのでしょうか」という話をすると、「いや、それは息子がやればいいんじゃないか」とか、「そういうことは、人に頼むんじゃないか」とか、「普段から付き合いをしてこなかった本人に責任があるんじゃないか」という自己責任論がすぐ出てきます。

「いやいや、でも、地区福祉委員会とか校区福祉委員会とか社協というのは、誰もが安心して暮らせるということを言っているじゃないですか。だから、そういう人たちも含めて助け合えないと駄目なんじゃないですか」と、いろいろな言葉を使って一生懸命話をしました。

そうすると、「いや、でも、あの人は、近所付き合いを今まで全くしなかった」とか、例えば「下の者に対して、いろいろ文句を言ったことがある」とか、そういう個人的な批判を挙げてみたり、どっちかという、うまく付き合っていない本人が悪いような話が出てきたという、とても悲しい話もたくさん聞きました。また、「実際にそういう問題があるっていうこと、連鎖が止まっているっていう問題などを言われても、地区福祉委員会は、そういう個人的な問題まで言われても、とてもではないがきりがいいじゃないですか」という話をされたことがありました。

千里ニュータウンというのは、豊中市の一つの特徴ある地域ですが、中高層の5階建ての団地が延々と続いている所でそういう問題が起きました。私が話をしたら、階段の上がり下りができないという人が出てきました。

では、そういう人たちを階段で下ろすのは、誰の仕事でしょうかという話です。仕方なく、近所の人たちが支えてくれないのだったら、まずは

ボランティアセンターで点と点をつなぎ、頑強なラグビー部の学生ボランティアをお願いして、階段の上がり下りを手伝ってもらうことになりました。

1回目はうまくいきました。でも、2回目に、また、病院へ行くから下ろしたいという話になったときに、今度は、「すみません。僕、その日には試験なので行けません」と言われてしまいました。「そうか、しょうがない」。ボランティアですから、無理やりに来てもらうわけにはいきません。では、次の人を一生懸命探すという、点と点の支え合いをしていました。

そういうことをやっていると、実は、私たちがしていることを、みんな遠巻きに見ていました。それで、そうやって下ろしてもらっている姿を見たときに、1人の人を助けるためにやると、近所で、実はうちも困っているという相談が出てきました。その先にも、実は私たちも困っているという話が聞こえるようになってきました。1人を助けるということで始めた点と点のつながりでしたが、実は、町の中に、声が挙げられないだけで困っている人たちがたくさんいるということが分かりました。

そこから、地域の人たちにもう1回話をしました。この町の中で助け合いの仕組みを作りませんかということで、小学校区ごとにボランティアグループをつくっていきました。団地の中に階段を下りられない人たちがたくさんいて、私たちは、その人たちのお尻を上げて階段を上られるように応援するというので、「尻押しボランティア」をその地域で組織化しました。

そうすると、みんながそのことで助かりましたが、「何で尻押しボランティアをやらなあかんのや」という話がぼんと出てきて、「手すりを付けたいんじゃないか」という話になってきました。今までは団地に手すりがありませんでした。若い人ばかりがいてと思っていた千里ニュータウンが、今やオールドタウンになっているのではないかが認識されるようになって、手すりが付くようになっていきます。

でも、それでも上がれない人がいるのではないかな。そうしたらどうしたらいいのという話になったときに、あるおばあちゃんが、「うちは、ピアノが5階まで上がったのに、どうしておじいさんが家まで上がれないんだろうか」ということを何回も話しているのを聞きました。

実際そのとおりです。どうして引っ越し用のものは上がっているのに、人間が上がるができないのか。全部にエレベーターを付けるなどといったら莫大な費用ですから、それはとてもできないと考えたとしても、何かできるものはないかということで一生懸命調べたら、キャタピラーで階段を登っていく階段昇降機という車椅子があることが分かりました。「それだ」と、見つけたときに自分のことを天才だと思いました。

それを見つけたら、今度は、値段が高く、30万円ぐらいしました。職場に、「これがあります。こんなもので何とかしたい」という話をすると、「そんなものを買えるお金はどこにもないよ」と言われてしまいました。これはお金をくれる人を探すしかないということで、ライオンズとかロータリーとか、いろいろな所に頼み歩きました。「実は、こういう人たちって困っているんです」という話をいろいろな人たちにすると、また助けてくれる人が出てきました。実は、自分の親も階段の家で困ったことがあるという話をしてくれる人たちが中にいて、お金をいただいて、階段昇降機という仕組みができました。

この仕組みができて、それを使って私たちが上がり下りしていると、相談がどんどん挙がってきます。福祉の相談は、ニーズがあっていろいろな仕組みができていくということを皆さんは学んでいると思いますが、供給があることによってニーズが掘り起こされていくという部分もとても大きいです。ですから、発見することと解決をしていくことは、両輪です。発見だけをしないでいくら言っても、みんな、解決策がない所に相談に来ません。

そういうことをしながら、私たちの各小学校区の中でボランティアグループができていき、地域

の中で触れ合いサロン、コミュニティサービスや子育てサロン、見守りを生み出していきました。

38校区全ての地域でこのことをやり出したときに、さまざまな人たちがいることが分かってきます。初めのうちは、一人暮らしの高齢者だけを支えることでスタートしましたが、一人暮らしの人たちだけが問題ではないことがみんな分かってきます。「勝部さん、高齢者2人世帯のほうが、大変な人が多い」「そうですね」という話です。

「気になる人がいます」ということで相談があって行ってみたら、その人は60代前半でした。この人の問題をどこに相談に行ったらいいのかということで聞かれました。「高齢者ではないし、障害者ではなかったら、どこに相談に行くの?」と言われたとき、どこにも相談に行く所がないという問題が出てきました。

ホームレスの問題は、地域の中でいろいろと話題になってきました。「勝部さん、公園にホームレスの人がいるんだけど、どうしたらいいの。市役所に相談したら、公園にいるんだったら、公園みどり推進課に電話しなさいって言われました。公園にいたんですけど、今、道に行きましたって言ったら、道に行ったんだったら、それは国道ですか、府道ですか、市道ですかと聞かれた。人だから、国道から市道に歩きますよって言ったら、じゃあ、豊中市の土木のほうにかけてみてくださいって言われた」。

市役所は縦割りです。市役所が縦割りというのは、悪いことではありません。そのことをエキスパートでやっていくので、その部分についての守備範囲をきっちりやります。でも、守備範囲というものもありますが、守備範囲のどこにも当てはまらないものがあることが分かりました。では、61歳の人は、助けることができません。65歳になったら、「高齢者福祉ですから、高齢者支援課に来てください」と言われます。制度にはざまがあることが分かるようになりました。

当時、ごみ屋敷ということが出てきました。ああいう人は、どこに相談に行ったらいいのですかという話のときに、ごみをためているから環境事

業部ですかということで電話したら、「ご本人がうんと言わなければ、ごみではありません」と言われました。「本人が、これは宝だと言っています」「そうしたら、環境事業部ではどうしようもありません」。制度のはざまがあることをすごく思いました。

地域の人たちが見守りを一生懸命やって、発見力は上がっていきます。でも、制度のはざまの問題を放っておいて、見守ってもそれを解決する仕組みがなかったら、地域の人たちは、見守り組織をやっているふりをし始めます。一番いい方法は、見て見ぬふりをする事です。掘り起こしを一生懸命やってくれていますが、掘り起こしたものをどんどん埋め戻し始めています。

今、社会福祉協議会という組織が、全国でいろいろなかたちで地域のネットワークをつくっていますが、それが機能不全になっているとすれば、解決策がとてつもない弱っているのではないかと。ぴんぼんときちんとはまるような問題ばかりだったらいいますが、そうではない問題を聞いたときに、「それはできません」、「これはうちではありません」と言ってばかりいるから解決しないのではないかと。

そこで、私たちの町では、平成16年に（第1期豊中市）地域福祉計画を立てたときに、コミュニティソーシャルワーカーという、はざまの問題をとにかく一手に引き受ける存在をつくらうと決めました。今、11名います。

もう一つのポイントが、地域の中で、何でも相談窓口というものをつくりました。これは、住民が窓口を運営しています。住民が相談を受けるというやり方をしています。専門職が相談を受けるといふふうにしていません。なぜか。専門職が相談を受けて、住民たちに、「ご協力をお願いします」とやることを繰り返していると、最初のうちは一緒にやってくれますが、だんだん、「やらされる。勝部さんが来たら、また何か言ってくる。また協力しろって話かな」という話になってきます。

今、住民たちは、自分たちの問題を発見して、

何でも相談に持ってきます。自分から相談に行ける人たちは自分で行政に行きますが、相談に行けない人、あるいは声が挙げられない人、自分で自分のことが問題だと思っていない人たち、いわゆる声なき声の人たちの問題が町の中にたくさんあって、その人たちは、自分から、「助けてください」という話はしません。近所の人や、そういう問題をちょっとお節介に、「あそこ、気になるよ」ということを持ち寄ってもらう場所として、福祉何でも相談窓口をつくりました。

「何か木がうっそうとして、あそこはすごいおうちよ。ご両親が亡くなったあと、あそこは、息子さんが1人で引きこもっているのかもしれない」といううちが出てきたり、「ごみ屋敷状態になっているけど、あそこって、今、どういふふうで暮らしてはるんだらうか。心配やな」という話が出てきたりします。

最初は、どちらかという、排除のような話が出てくる場合があります。苦情のような相談が多いです。これまでの行政の福祉は、「助けてください」と本人が言ったら、「助けます」あるいは「助けられません」とジャッジします。申請主義ですから、「助けてください」と言ったときに、助けます助けませんというのを判断されます。

でも、今、私たちが取り組んでいる、このコミュニティソーシャルワーカー、そして、今年からスタートした生活困窮者自立支援法は、本人がSOSを出せない人の所にアウトリーチをかけて、その人たちの問題を発見して、「助けさせてください」と行きます。本人は、「福祉の相談なんか受けたくない」と言っている人、あるいは自分はまだそこまで至っていないと思っているけれども、周りから見て、専門職の立場から見ると、明らかに課題があるという人たちの所に、「助けさせてください」と行きます。

ごみ屋敷の問題で、私たちの町も随分いろいろな所に知られるようになりました。10年間で、既に、350件ぐらい片付けをしました。それは、ほぼ元に戻らないかたちの支援を行っています。

どうしてそういう問題が起きているかという

きに、初めは、ごみ屋敷の人たち、アルコール依存で町の中で倒れている障害者のような人たちは、周りの人から見ると、困った人だと言われていました。でも、困った人というのは、実は、困っている問題を必ず抱えている人ということが、関わりの中で分かってきました。

何でも相談に寄せられる問題は、気になる人です。気になる人というのは、周りから見たら少し困った状態の人たち、困った問題を抱えている人だということを翻訳していきます。

ごみ屋敷で、犬を放し飼いにしている人がいました。周りから見たら、犬を放し飼いにしている、何か大変な人です。最初は保健所に連絡しました。保健所の人は、ピンポンを押して、「すみません。犬を放し飼いにしないでください」と言いました。「帰れ」。1時間ぐらいの口論で終わりました。それで、うちに、「すみません。ごみ屋敷のことは、勝部さんの所に行ったら何とかなると聞いたんですけど」と言う人が、保健所から来ました。

「その人を知っていますか」と言うから、「私は存じ上げていないので、じゃあ、一度訪問させていただきます」。ピンポンと押しました。そうしたら、中から70代の人がぬーっと出てきました。私は、「どうされたんですか。体調が悪いんですか。お体は大丈夫ですか」と声をかけました。「ふーん。今まで来た人の中で体のことを心配してくれたのは、あんただけやな。今まで来た人間は、ごみを捨てるとか、犬を何とかしろとか、俺のことを何も見てくれないで、犬の話とごみの話しかしなかった。体のことを気遣ってくれたのは、あんただけやな」と言われました。

「実は、3カ月ぐらい前に肺炎になって、家から一歩も出られなくなった。だから、ごみを捨てることができなくて、家の玄関のほうにためていった。犬を散歩に連れていくことができないので、犬を放し飼いにしていた」。体が弱っていました。そこから、私たちは、本人の体をケアし始めて、本人の体を回復させていく中で信頼関係をつくって、ごみを片付ける了承を得ました。

ごみを片付けていると、その人のストーリーが

分かります。今までのストーリーが全部分かります。何を大事に生きてきたかがよく分かります。そういう話をしながら、この人は、今はごみ屋敷の住人のように、周りの人から困った人と言われているけれども、実は、かつて学校の先生をしていたとか、この人は、子どもを大事に育ててきたことが分かります。そういう本人の心と付き合いをするようになると、ごみ屋敷の住人なんていう気持ちで付き合いません。そうなるので、心がつながります。

私たちがやっているもう一つのポイントは、家を片付けるときに、地域のボランティアの人たちのリーダー層の人たちに、必ず一緒に手伝いをしてもらっています。排除する住民は、町の中に必ずいます。「あそこを何とかしろ」と言う人です。そして、困った人の間に盾になってくれるリーダー層の住民をつくっていきます。この住民が、文句を言う人の側に立つのか、困った人の側に立ってくれるのかで、地域は大きく変わっていきます。

この人が、排除する側に立って、一緒になって、「あんた、ごみを片付けなさい」と言っていると、困った人は、どんどん孤立して行って、この町に住めなくなります。いわゆる社会的排除になります。でも、その人たちが、私たちと一緒に片付けることを繰り返していくと、その人自身は、周りで支えてくれる人がどんどん増えていくので、家が片付くとともに、片付いたあと、自分を支えてくれる人間関係が自分の周りにできていきます。社会的孤立の象徴こそがごみ屋敷だということを、すごく実感しました。だから、そういうサポートする人たちをつくります。

豊中市では、ごみの問題を片付けていくと、実際、サポートする、理解をしてくれる周りの人たちが同時に増えていくかたちをつくっているの、ほとんど再発しません。そして、元の町に住み続けていくことができます。

「社協は、遂にゴミの片付けまでやり出したか」とか、「ごみの片付けをすることに住民を使っているのか」と最初の頃は言われましたが、実際に

関わってくれたボランティアの人たちが、「実は、自分の親も、家の中が片付けられていなくて、高齢者になって大変なんだ」、「認知症の母親を持っていて大変なことがあるんだ」とぼつぼつと話すようになります。みんなひとつごとのように言っているけれども、自分たちの問題だということが分かってきます。

私たちが、一番厳しい人を絶対に離さないということをやり続けていくと、地域の人たちは、自分たちもこの町にいて安心だと思ってくれるように変わっていきます。

そして、1人の問題をサポートしていくときに、ごみ屋敷の問題は、ごみのことだけで言うと、分別を誰がやるか、運搬を誰がやるか、費用を誰が負担するかという問題が解決しなければ、結局なかなか進みません。これを動かしていくために仕組みを作って、豊中市のいろいろな活動をやっているというのを知らせます。

ライフセーフティーネットの仕組みがあります。これは地域福祉計画の中で位置付けをしていますが、この計画の中で位置付けをしたことで、私たちは、大手を振って仕組みを作れるようになりました。階段昇降機の仕組みを作った頃は、私たちが、ニーズを聞いて、これを幾つかの仕組みにしていくことについて、いろいろなところに頭を打ちながらいろいろなことをやってきました。今では、住民たちが相談を挙げてきて、制度のはざまのものだったらコミュニティーソーシャルワーカーにつなぎ、そして、その中で課題があると思うときには、プロジェクトとして、(豊中)ライフセーフティーネット総合調整会議という、市の課長級の会議に提案することができます。そして、こういう仕組みを作れば改善するのではないかとすることを提案していく中で、35個のプロジェクトが、この10年間で立ち上がりました。

(地域福祉)ネットワーク会議は公民協働で、住民と専門職が一緒になる会議です。さらに、社会福祉施設も、公・民・障害・児童が全部一緒に集まり、地域の課題、地域を見守っていくかということを話し合います。

初めは、高齢者の施設の人は、「何で児童の施設と一緒にここに集まっているのか、意味が分からない」と言っていました。「障害者の問題と高齢者の問題は別々だ」と言っていました。でも、世帯は一緒です。高齢者虐待と言われているそこには、実は、発達障碍の息子が一緒に住んでいたりとか、シングルマザーで帰ってきている親子がいて、子どもがこれこれこういう状態になっているとか、家族の中にいろいろな問題があることを考えたときに、自分たちはパーツで支援していきますが、家族全体を支えていくときには、みんなが力を合わせないと実際のところは見つかりません。

みんなが、「ひきこもり」の息子さんのことをどうやって発見できるかと考えている横で、実際は、ヘルパーが入っていたりします。その人をよく知っているのはヘルパーなのに、『引きこもり』は、私は関係ありません」となって、その問題は社会に出てこないという問題があります。

このことをここでいろいろ話をしていますので、専門職の発見力が、どんどん高まっています。自分の問題ではない問題が課題だと思ったら、それをつないでいくことができるようになっています。そして、いろいろな問題が出てきたら、私たちが、ライフセーフティーネット総合調整会議に提案していきます。問題がどんどん解決していったら、いろいろな問題が町の中のどこにあるかが分かるようになりました。

「ひきこもり」の問題は、80代の男性から息子の家庭内暴力のことで相談がありました。50代の息子で、30年引きこもっていました。「30年間もどうして相談に来なかったんですか」と聞いたら、「どこに相談に行っても、誰も対応してくれなかった。最初は相談に行った。でも、どこも相談に乗ってくれる所がなかった。だから、誰にも頼まないで見ていくしかないと思った。親の育て方が悪くてこうなった。自己責任だと思っていた。だから、ずっと1人で頑張ってきたんだ」。

「分かりますか」とコップを見せられました。「僕

たちは、コップの中に水がいっぱいたまっている状態なんです。だから、動かすところぼれる。何も動かさないこと、変化をさせないことが一番の安心で、今日の続きの明日、明日の続きのあさってと思っているうちに、30年たったんです」と言われました。「でも、今まで、家庭内暴力をする息子を力で制して、遂に、息子の力に及ばぬようになって、自分は、たった2、3枚の畳の所で転ぶようなことになった。もう自分は、子どもを支えることができなくなってしまうようになった」という言葉がありました。

そういう問題を聞いて、私たちは、家族会を立ち上げました。今、この息子は、一人暮らしを始めています。そして、いろいろなサービスを使って暮らせるようになっていますが、そういうふうにはやらなければ、うまくいかなかったと思います。

この人の問題から、仕組み作りを始め、発達障碍の家族会ができました。そして、家族会と併せて、今度は、こういう「ひきこもり」の子たちを放っておけないことが分かってきました。彼らは行く場所がない。では、出ていく場所をつくらうということで始めたのが、私たちの町の「びーのびーの」という、「ひきこもり」の人たちの居場所です。今、80人の人たちがそこに出てこられるようになり、20人が働けるようになりました。3年前から始めました。

これは制度ではありません。自分たちの私的な事業で始めていきました。いろいろなものをそこで販売をしています。今回のドラマの基本にあった漫画の本も、彼らの能力でできたものです。彼らの能力が社会に発信したのです。

1人の問題から仕組みを作ることをやり続けていきます。1人の問題は、その人だけの問題ではなく、同じように悩んでいるAさん、A'さん、A''さんが必ずいることを想像して、そういう仕組みを作っていくことになるので、私たちは、「助けさせてください」と行きます。「助けさせてください」「結構です」「助けさせてください」「結構です」「助けさせてください」「あんたがそこまで言うんだったら、まあ、いいよ」と言われます。

「助けさせてください」というのは、実はその人が言いたくない問題を一生懸命私たちに伝えてくれたことで、その問題から町を良くしていく仕組みができます。「あなたがあのときに勇気を持って私たちに心を開いてくれたから、こういう障碍者の方々の昇降機ができたのだ」あるいは『『ひきこもり』の人たちの居場所づくりにつながったのだ。そして、そのことを通じて、働ける人たちが出てきたのだ」となっています。

こういう問題は、近所の人たちが、1人の問題を見て見ぬふりをしないで一生懸命声をかけた。そのことによって仕組みができたので、地域の人には、また声をかけよう、また見つけようというふうにしてつながって、彼女たちの生活が良くなっていくことに協力したいと思う人たちが増えていきます。

ボランティアはどこにいるのですか、この町のどこにボランティアがいるのかと思ったのが、今では8千人になったという話ですが、そういう思いをする人たちを地域の中にたくさん増やしていった、助けてあげたいと思う人たちを、地域の中にたくさんつくっていったということで、ごみ屋敷の話をしました。

いろいろな支援をしています。1人を助けることが地域を優しくしていく。そういう問題を、私たちワーカーがやることだけではなくて、住民たちの力を借りながらやっていきます。こういうコミュニティーソーシャルワーカー、コミュニティーを背景にしながらソーシャルワークをしていくことができるという醍醐味が、今、豊中の町では、だいぶ実践ができるようになってきました。

これは徘徊の問題です。これも徘徊をする人の問題が、(認知症高齢者・障害者)徘徊SOSメールという、携帯メールで一斉送信をしていく仕組みをサロンの中で作りました。

これだけいろいろなことをやりましたが、いろいろなことをやっても、やはり孤独死はなくなりません。町の中は、どんどんばらばらになっています。私たちが力を出しても、いろいろな仕組みを作っても、ばらばらになっていくことはもっと

早いスピードで進み、孤独死が終わりません。

ちょうど1年半ほど前、「プロフェッショナル」という番組が流れる少し前です。私が2年間ほど通った人のうちがありました。うちに行って、「心配しています。連絡してください」と名刺を差して帰ってきます。応答がありません。そして、また行くと名刺がなくなっているの、また書いて帰ってきました。そういうやりとりをずっとしていました。

10月下旬に行き、次に11月半ばに行ったときに、名刺が差したままになっていました。危ない。中で倒れているかもしれない。でも、もう1軒別のうちがあって、時々そちらに行っているという話も聞いたことがあるので、そっちに行っていると信じたかった。近所の人が電気がついていたという、本当かは分からない話がありました。レスキュー隊を呼んで、中を開けることにしました。残念ながら、亡くなっていました。

私はそこに30回ぐらい通いましたが、玄関には、私の名刺が30枚、きれいに重ねて置いてありました。「何月何日何時ごろ」と本人が記していました。彼は1人で亡くなりましたが、彼の心には私がいたと思いたいと思いました。

その日の晩、一緒に行った（地域）包括（支援センター）の職員と、2人で最後に泣いてあげる人になろうということで、2人で行って、「お通夜」と称して、彼の死を悲しみました。扉の向こうに命があったのに、そこに届かなかったという思いがありました。

地域の中には、SOSを出せない人たちがたくさんいます。そういう人たちを1人でも少なくしていく。それは、専門職だけでは絶対不可能です。地域の中には、声を挙げられない人がたくさんいます。それをサポートするということでは、専門職だけでは、そこまで届く人はごく一部の人です。そう考えたときに、私たちソーシャルワーカーは、自分が力量を持って人を支えていくことはもちろんありますが、その周りにそういう思いを持ってくれる住民をどれぐらいつくれるか、サポートできる人たちをどれぐらいつくれるか、サポート

できるか、そことどうやって協働できるか。そのことが、実は、とても大事ではないかとも思っています。

「プロフェッショナルとは」ということを、私は、あの番組に何度も聞かれました。「いや、私は、プロフェッショナルなんていう言葉を言いたくない」とずっと言っていました。最後に、「SOSを出せない人たちがたくさんいる社会ですから、そういう人たちを1人でも少なくしていこう。そのことを一生懸命努力していく。これが、私の仕事の大切なことだと思っています」という話をしました。

力量あるソーシャルワーカーというのは、何をもって力量があるのかは分かりませんが、目の前の1人を支えることから逃げない。そのことをしっかりやり続けていく中で、その人を支えるためにどんな仕組みがあったらいいのか、その人を支えるために、どんな人たちを周りにつくっていくのがいいのか、独りぼっちにさせないためにどうしたらいいのか。そのことをしっかりやれなくて仕組み作りだけをやるのは、これは、また、話が違うように思います。1人を助けることは、地域を優しくしていくことだと思いながら、そういう問題にしっかり向き合っていくことを繰り返して、私は、今、努力しています。ご清聴、どうもありがとうございました。